

『毎月抄』校本

— 八本対校

渡 邊 裕美子

一 はじめに

『毎月抄』は、藤原定家著とされる歌論書である。中世末になって細川幽齋が定家著の歌論として尊重して『和歌六部抄』の一つに数え、その『和歌六部抄』が近世期に版行されて流布したため、後代への影響が極めて大きい。ところが、この『毎月抄』は本当に定家が著した書なのか、それとも後人が偽作したものなのか、長らく論争の対象となってきた。定家は、没後、神格化されたため、定家に仮託した書が多く作られた。「鶴鷺系偽書」と呼ばれるそうした偽書群は、早くに偽書であることが明らかにされ、いま、これを疑う者はいない。しかし、『毎月抄』はそれらとは一線を画す存在であった。そのような中、定家やその父俊成に由来する多くの歌書を受け継ぐ冷泉家時雨亭文庫に、冷泉為秀（定家曾孫）自筆本を透写したという近世期の写本が蔵されていることが明らかにになり、それ以降、『毎月抄』は定家の著作として扱われることが多くなった。ちなみに、一般的には、研究者の論争をよそに定家著と断定されることが多く、Japanknowledgeで『毎月抄』と引いてみると、『国史大辞典』は「藤原定家著という」と断定を避けているが、『日本国語大辞典』を初めとする多くの辞書・百科事典が「藤原定家著」としている。

しかし、近年、さまざまな視点から解析が進み、『毎月抄』はやはり定家著とは認め難いとする論調が強くなっている。その上で、なぜ鶺鴒系偽書とは異なり、長らく定家の真作か否か決着がつかないでいるのか、その内容的な特徴や執筆された時代状況、執筆意図を見極める必要があると説かれるようになった。^① 研究が新たな展開を見せ始めているのである。

現在、『毎月抄』を論ずる際には、本文は冷泉家時雨亭文庫蔵本に拠ることが多い。しかし、この伝本が、『毎月抄』の現存諸本の中でどのような位置にあるのか、明らかにされているとは言い難い。かつて高梨素子により、五つの伝本を対校した『毎月抄』の校本が作成されたことがあるが、それから四〇年以上が経過している。しかも高梨の論考は時雨亭文庫本の出現以前のものである。研究状況が新たな段階に入りたいま、本文について改めて整理検討することが急務と思われる。人の手で筆写する写本が主流だった室町以前の書物を検討するに当たっては、こうした研究の基盤を整備しないことには進めないのである。本稿では八本を対校して、校本の作成を試みた。

二 『毎月抄』の伝本分類

取り上げる八本について紹介する前に、まず、これまで『毎月抄』の伝本について、どのように考えられてきたのかということに触れておきたい。『毎月抄』の伝本は、奥書と本文の内容から、大きく冷泉家系統本と二条家系統本に分けられている。^② 『毎月抄』では、本奥書として、まず、為家（定家息）のものとする、

〔為家〕承久元年七月二日或人返報云々、以被草本為備後生之用心、聊染筆了／藤原朝臣為家

が記されることが多い。冷泉家系統本では、これに為秀の奥書が続く。その為秀の奥書には次の三種あることが知られている。

〔為秀 A〕 此本静為披見俄於燈火片時書写候、仍更無文字形、尤不可免他見而已／侍従為秀

〔為秀 B〕 以相伝秘本具令書写校合訖、尤可為証本哉／左少将藤原為秀

〔為秀 C〕 此一帖曾祖父京極中納言〔定家卿〕口伝也、而以祖父入道大納言〔為家卿〕自筆本令書写訖、

深可禁外見而已／貞治四年八月一日／冷泉前中納言為秀

また、本文内容としては、両系統間で細かな異同も多いが、校本の最後に挙げた異文のうち【異文 1】と【異文 3】は冷泉家系統本は持たないことが多く、二条家系統本はほぼ持っているという違いがある。特に【異文 3】は長文で問題が大きい。

本稿では、冷泉家系統本のうち〔為秀 A〕の奥書を持つ安田女子大学図書館稲賀文庫蔵本を底本とした。〔為秀 A〕奥書は時雨亭文庫蔵本が公刊されて、初めて注目されたものである。為秀の官職から考えて、三種の奥書のうちもつとも若い頃の書写と考えられる。今回、調査の結果、稲賀文庫本が時雨亭文庫本と同じ奥書を持ち、しかも時雨亭文庫本が近世後期写であるのに対して、近世前期まで書写年代が遡る本であることが明らかになった。両本は本文内容が極めて近い。本文の書写態度からすると、稲賀文庫本は時雨亭文庫本よりも誤写や補入が少なく、良質な本文と言える。

その他、冷泉家系統本としては、〔為秀 B〕奥書を持つ静嘉堂文庫蔵本、〔為秀 C〕奥書を持つ広島大学図書館蔵本を対校本とした。また、もう一本、対校本として加えた穂久邇文庫蔵本は〔為家〕の奥書のみで為秀奥書は持たず、冷泉家系統本には見られない異文三種をすべて持つ。しかし、本文内容から同本の基盤となったのは冷泉家系統本と考えられ、異文三種は、親本以前の伝写の段階のどこかで二条家系統本と接触し

て取り入れられたと考えられる。この穂久邇文庫本はこれまで未紹介の本である。

一方、二条家系統本では、為家奥書を持たず、次の三種の奥書を持つ伝本が知られている。

〔凝念〕 建武四年五月十日以彼写本楚忽書写之、此庭訓者京極入道中納言令送故衣笠内府許云々、条々之旨趣一々甚深也、可秘々／桑門凝念

〔通秀〕 文明九年三月五日以或秘本令書写之、和歌之秘伝当道奥旨也、雖為留布之抄、更不可处料余者乎／特進源通秀

〔宋堤〕 同十七年小春上九於燈火一時終功了、彼本者中院一品（通一）自筆也、依或人之尊言令書写之 处也／桑門宗堤

この三種の奥書の前の位置に、冷泉家系統本にも見られた「為家」奥書と、次の二条為氏（為家息）のもととされる本奥書を持つ本がある。

〔為氏〕 建長五年八月二日以亡父卿自筆本令書写畢／藤原朝臣為氏

本稿では、「凝念」〔通秀〕〔宗堤〕の奥書を持つ永青文庫蔵本、その前の位置に「為家」「為氏」の奥書を持ち、「宋堤」は持たない京都大学国文学研究室蔵本、「為家」「為氏」の奥書のみで「凝念」以下の奥書は持たない京都女子大学谷山文庫蔵本を対校本とした。このうち谷山文庫本も未紹介の本である。

三 取り上げる伝本

以下、各伝本の書誌や特徴など詳細については、紙幅の都合上、別稿に譲ることとして、ごく簡略に取り上げる八本について紹介しておきたい。伝本名の下の「」内に校本で用いる略号（二条家系統本はゴチツ

ク体)を示した。

●冷泉家系統本

一、安田女子大学図書館稲賀文庫蔵本(イナガB-0008)(底本)

【外題】毎月鈔 【内題】ナシ 【奥書】為家十為秀A 【備考】袋綴一冊。近世前期写。

二、冷泉家時雨亭文庫蔵本〔冷〕

【外題】秘抄 【内題】ナシ 【奥書】為家十為秀A 【備考】冷泉家時雨亭叢書37『五代簡要 定家歌学』(朝日新聞社、一九九六)の影印に拠る。享保二〇年(一七三五)冷泉為久書写奥書、宝暦二年(一七五二)冷泉為村識語有り。

三、静嘉堂文庫蔵本(18683/4/1053)〔静〕

【外題】庭訓抄 【内題】ナシ 【奥書】為家十為秀B 【備考】マイクロフィルム『歌学資料集成…静嘉堂文庫本』に拠る。日本歌学大系第三巻の底本。マイクロ資料付属『収録書総目録』に伝清水谷実秋(？)一四二〇)筆とある。室町写。

四、広島大学図書館蔵本(大國2182)〔広〕

【外題】ナシ 【内題】ナシ 【奥書】為家十為秀C 【備考】綴葉装一帖。錯簡有。椀山幸久(一五二一—一五九五)の書写奥書有り。室町末写。

五、穂久邇文庫蔵本(二・二・202)〔穂〕

【外題】毎月抄 【内題】ナシ 【奥書】為家 【備考】綴葉装一帖。近世前期写。

●二条家系統本

六、永青文庫蔵本〔永〕

【外題】和歌秘抄部類（『阿仏口伝』『近来風体』と合綴）【内題】ナシ【奥書】凝念＋通秀＋宋琨【備考】細川家永青文庫叢刊9『歌論集』（汲古書院、一九八四）の影印に拠る。巻末に天正一九年（一五九一）一二月の「玄旨」（幽齋）の奥書があり、版本『和歌六部抄』の祖本と考えられている。

七、京都大学国文学研究室蔵本（国文学／F c / 3 a）【京】

【外題】毎月抄（全）【内題】毎月抄【奥書】為家＋為氏＋疑念＋通秀【備考】袋綴一冊。近世後期写。

八、京都女子大学図書館谷山文庫蔵本（090 / T a 8 8 / 5 4 5）【合】

【外題】毎月抄 雨中吟 嵯峨禅尼之詞 未来記 十躰 為家書札（外題に記された五つの書と合綴）。【内題】和歌用心（号毎月抄）【奥書】為家＋為氏【備考】袋綴一冊。『為家書札』の応永二二年（一四一五）の本奥書がもつとも下る。近世中期写。

●校本（改行は底本のままとし、ミセケチは左傍に「ヒ」とした）

毎月の御百首能々拜見せしめ候ぬ凡此たひの
御哥まことにありかたう見申し候へは年来をろか
なる心にかたしけなき仰のいなみかたさはかり
をかへりみ候とてわつかに先人申をき候し庭
訓のかたはしを申候き定て後の世のわらはれ
くさもしけうそ候覧なれともさすかにそのあと
や候むと御哥もことの外によみつのらせおはし
まして候へは返々本意に覺させ給て候仰

1 せしめーし（谷）

2 御哥ー御哥さま（永・京・谷）

3 候へー候得（穗）

4 年来ーナシ（永）

5 先人ー先人の（広・永・京・谷）

6 候しーし（永・京）

7 庭訓のかたはしをーかたはしを庭訓（谷）

8 ーナシ（永・京・谷）

9 候しー侍し（永・京・谷）

10 勅集ー勅撰（広・穗・永・京）

11 しつかにーナシ（永・京）

12 御らんせられ候てー御覧せられて（穗）、見かへし

て代々に（永・京）、御らんせられて代々に（合）

哥はたゞ日来しるし申候しことく万葉
 よりこのかたの勅集をしつかに御らんせられ候て」⁹
 かはりゆき候けるすかたともを御心得候へそれに
 とりて勅撰の哥なればとてかならず哥ことに
 わたりてまなふへからず人にとまなひ世にした
 かひて哥の興廢みえ侍り万葉はけに代も
 あかり人の心もさえて今の世にはまなふとも
 更に及へからずことに初心の時をつから古躰
 をこのむ事有へからず但稽古年かさなり
 風骨よみさたまる後は又万葉の様を存せ²⁶
 さらん好士は無下の事とそ覺侍る稽古²⁸
 の、ちよむへきにとりても心あるへきにや」²⁹二オ
 すへてよむましきすかた詞といふはあまりに俗に
 ちかく又おそろしけなるたくひを申侍へし³²
 よろしくそれはいまさため申にをよはず此し³³
 たにて御了見候へ此御百首に多分古風のみえ³⁴
 侍からかやうに申せは又御退屈や候はんすらめ³⁵
 なれともしはしはかまへてあそはすましきにて候³⁶
 今一兩年はかりもせめてもとの躰をは³⁷

- 13 かはりゆき―かはりもてゆき(永・京・谷)
 14 候ける―候(永・京)
 15 ともを―を(谷)
 16 とて―ナシ(谷)
 17 わたりて―とりて(永)
 18 す―す候(永・京)
 19 興廢―興廢を(広)
 20 万葉―万葉集(永)
 21 さえて―さらて(広)、まして(永・京)
 22 今の世には―今の世に(穗)、此世には(永・京)
 23 とも―事も(谷)
 24 更に―ナシ(永・京)
 25 をのつから―をのつからも(永・京・谷)
 26 さたまる―さたまりて(永・京・谷)
 27 存―存知(広)
 28 は―も(谷)
 29 の―ナシ(永)
 30 詞―詞侍るなりよむましき姿詞(永・京・谷)
 31 は―ナシ(冷)
 32 申侍―申(永・京)
 33 それは―それを(永・京)
 34 いま―今更(広)
 35 の―ナシ(谷)
 36 侍から―侍かし(広)、侍り(谷)
 37 御退屈―退屈(永)
 38 や―もや(広)
 39 らめなれ―らんとなれ(広)、らんと存すれ(永・

たらかさて御詠作あるへく候もとのすかたと申は⁴⁰
 勘申し候し十躰の中の幽玄様事可然様

⁴¹麗^{ウルハシキ} 様有心躰⁴²これらの四にて候へし此躰⁴³ともの「ニッ

中にもふるめかしき哥ともはよくみえ候へともそれは⁴⁴
 は古躰なからもくるしからぬすかたにて候たゝす
 なほにやさしきすかたをまつ自在にあそはし

したゝめて後は長高様見様面白様有一節⁴⁵
⁴⁶様濃様などやうの躰はいとやすき事にて候鬼⁵⁰

拉⁴⁷の躰⁴⁸ぞたやすくまなひおほせかたう候なる⁵¹
 それも鍊磨の後はなとかよまれ侍らさらん(※①)

初心の時はよみかたきすかたにて侍なるへし
 まつ哥はたゝ和国の風にて侍るうへは先哲⁵²⁵³⁵⁴

のくれゝかきをける物にもやさしくものあはれに「三才
 よむへき事とそみえ侍めるけにいかにおそろしき⁵⁵⁵⁶
 物なれとも哥によみつれば優にきゝなざるゝ

たくひそ侍るそれにもとよりやさしき花よ月よなど⁵⁸
 やうの物をおそろしけによめらむはなに

の詮か侍らんさても此十躰の中にはいつれも⁵⁹⁶⁰⁶¹
 有心躰にすきて哥の本意と存するすかたは⁶²⁶³

有心躰にすきて哥の本意と存するすかたは

京)

40 申—申候(冷・静・広)

41 麗様—濃様(永・京)

42 これらの—これら(京)

43 へし—へく候(永・京)

44 よく—まゝ(永・京・谷)

45 様—ナシ(谷)

46 様—ナシ(谷)

47 様—ナシ(谷)

48 は—ナシ(京)

49 事—ナシ(永・京)

50 鬼拉の躰—拉鬼体(永・京・谷)

51 ぞ—は(谷)

※①【異文1】(穂・永・京・谷)

52 和国の風—和国(穂)

53 は—ナシ(永・京・谷)

54 先哲—先人(谷)

55 とそ—にそ(永・京)

56 侍める—侍る(永・京)

57 おそろしき物—おそろしう物とをき物(永・京・谷)

58 なら—などの(冷)

59 此—ナシ(広)

60 には—に(広・京・谷)

61 いつれも—いつれと申とも(永・京・谷)

62 存する—存せる(広・永・京)

63 候—ナシ(永)

侍らすきはめて思えかたう候とさまかうさま
 にてはつや／＼つ／＼けらるへからすよく／＼心をす
 ましてその一境に入ふしてこそまれにもよま
 るゝ事は侍れされはよろしき哥と申候は哥「三ウ
 ことに心のふかきをのみそ申ためるあまりに又
 ふかくこゝろをいれんとてねちすくせはいりほか
 のいりくり哥とて堅固ならぬすかたの心えられ
 ぬは心なきよりもうたてくみるしき事にて
 侍るこのさかひはゆゝしき大事にて侍る猶く
 よく／＼斟酌あるへきにこそ此道をたしな
 む人はかりそめにも執する心なくてなをさりに
 よみすつる事侍らす無正躰哥誂いたして
⁸⁰毀人の難をたにもおひぬれは退屈の因縁と
 もなり道の毀^{キハ}廢^イとも又なり侍へきにこそ」^{四才}
 されは或は難をおひはてゝ思死にまかりしたく
 ひもきこえ侍り或は秀哥をまろなからと
 られて侍か没して後⁸⁶その人のゆめにみえて我
 哥返せとなく／＼かなしみけるによりて勅集⁸⁸
 よりさりいたしける事も侍にやかゝるためし⁸⁹

- 64 てーナシ (谷)
 65 もーナシ (永・京)
 66 はーナシ (永・京・谷)
 67 申候は 申候 (冷・静)、申は (永・京・谷)
 68 のみーナシ (永・京)
 69 いりくりーいりへり (広)、ゐかへり (永・京、
 いかへり (谷)
 70 心ー心の (永・京)
 71 うたてくーうたてう (永)、うたてし (京)、う
 たてふ (谷)
 72 にてーにそ (永・京・谷)
 73 侍るー侍り (広)
 74 はーか (冷・広・穂・谷)
 75 侍るー侍り (広)、候 (永・京・谷)
 76 猶くーナシ (静)
 77 よく／＼よく (永・京・谷)
 78 たしなむーたしなまむ (永・京・谷)
 79 侍らすー侍るへからす (広・永・京・谷)
 80 毀人ー人 (永・京・谷)
 81 もーナシ (永・京)
 82 道のー道 (広)、又道の (永・京)
 83 又ーナシ (永・京)
 84 まかりしー身まかりし (広)、まかり侍し (永・
 京)、死侍し (谷)
 85 て侍かー侍りて (広)
 86 後そのー後も (京)
 87 かなしみーかなしひ (広)

これにかきらすまことにあはれにそおほえ侍⁹⁰
 相構て兼日も当座も哥をは能く詠吟して⁹¹
 こしらへて出へき也疎忽の事はかならず後難⁹²
 侍へし常に心ある躰の哥を心にかけてあそ
 はし候へく候但すへて此躰のよまれぬ時の侍也⁹³ 四ウ
 朦気さして心底みたりかはしきおりはいかによ⁹⁴
 まむと案すれとも有心躰出来すそれをよ⁹⁵
 まむくとしのき侍れはいよく性骨もよはりて⁹⁶
 無正躰事侍なりさらむ時はまつ景気哥とて⁹⁷
 すかた詞のそゝめきたるかなにとなく心はなけ
 れとも哥さまのよろしくきこゆる様をよ⁹⁸
 むへきにて候当座の時ことさら可心得ことに候⁹⁹
 かゝる哥たにも四五首十首よみ侍ぬれば蒙味も¹⁰⁰
 散して性機もうるはしく成て本躰によま¹⁰¹
 るゝ事にて候又恋又述懐などやうの題をえて¹⁰²「五才
 はひとへにたゝ有心の躰をのみよむへしと覚¹⁰³
 て候此躰ならてはよろしからぬ事にて候さ¹⁰⁴
 ても此有心躰は餘の九躰にわたりて侍へし¹⁰⁵
 そのゆへは幽玄にも心あるへし長高にも又

88 勅集―勅撰（広・永・京）、勅集の中（谷）
 89 さり―きり（冷・静・広・穂・永・京・谷）
 90 これ―ナシ（広）
 91 て―ナシ（永・京・谷）
 92 後難―後に難（永・京）
 93 へく候―へし（穂）
 94 さして―きさして（谷）
 95 有心躰―有心躰の哥（永・京）、有心躰哥（谷）
 96 出来す―出来たらす（広）、出来せず（永・谷）、
 出来らす（京）
 97 景気―景気の（永・京）
 98 様を―やうに（谷）
 99 ことさら―殊に（谷）
 100 ことに―ことにて（永・京）、「ことにゝ蒙味も」
 ナシ（谷）
 101 十首―ナシ（永）
 102 侍―ナシ（永・京）
 103 蒙味―蒙気（広・穂）
 104 て―ナシ（永・京・谷）
 105 本躰―十躰（広）
 106 やう―ナシ（永・京）
 107 有心の躰―有心躰（永・京・谷）
 108 て―ナシ（永・京・谷）
 109 なら―かく（広）
 110 候―候（永・京）、候へきか（永・京）、候へき
 にか（谷）
 111 侍―心侍（永・京・谷）

侍¹¹¹へしのこりの躰も又かくのことしけにく
 いつれの躰にも実は心のなき哥¹¹⁴かわろき
 にて候今此十躰の中に有心躰¹¹⁵とてつらね
 いたし侍るは餘躰¹¹⁶の哥のあるにては候はず一向有¹¹⁷
 心の躰をのみさきとしてよめるはかりをえらひ
 いたして侍也¹¹⁸いつれの躰にてもたゞ有心の躰を¹¹⁹「五ウ
 存へきにて候又哥の大事は詞の用捨にて侍へし
 詞につきて強弱¹²⁰大小候へしそれをよく見した、
 めてつよき詞を¹²¹は一向にこれをつ、けよはき詞を
 は又一向に¹²²これをつらねかくのことく案し返し、
 ふとみほそみもなくなひらかにき、にくからぬ
 様によみなすかきは¹²³めて重事にて侍也¹²⁴申
 さはずへて詞にあしきもなくよろしきもある
 へからすた、つ、けからにて哥詞¹²⁵の勝劣侍へし
 幽玄の詞に鬼拉¹²⁶の詞などをつらねたらんは
 いとみくるしかるへきにこそ¹²⁷されは心を本として¹²⁸
 して詞を取捨¹²⁹せよとそ亡父卿も申をき侍し¹³⁰
 或人の花実の事を哥にたて申てはんへるに¹³¹
 とりて古の哥はみな実を存て花をわすれ近代¹³²

- 112 もーにも (永・京)
 113 「又、いつれの躰にも」ナシ (谷)
 114 いつれー何 (永・京)
 115 にもーも (永・京)
 116 かーは (永・京)
 117 ーにも (京)
 118 いたしーいたして (永・京・谷)
 119 餘躰ー余の躰 (永・京)
 120 あるー心ある (広・穂・永・京・谷)
 121 有心の躰ー有心躰 (広・穂・谷)
 122 いつれの躰ー何躰 (永・京)
 123 ーにもーにも (永・京・谷)
 124 有心の躰ー有心躰 (広)、心有様 (永・京)、有
 心様 (谷)
 125 又一向にーナシ (広)
 126 なひらかーたひらか (京)
 127 きはめてーきはめたる (永・京)、きはめての (谷)
 128 申さはー申さずは (永)
 129 詞ーナシ (谷)
 130 鬼拉ー拉鬼 (永・京・谷)
 131 ーにもに (京)
 132 してーナシ (冷・静・広・穂・永・京・谷)
 133 詞をーナシ (広)、詞をは (永・京)
 134 侍しー侍しか (永・京)
 135 或ー誠 (冷)
 136 のーナシ (広・穂)
 137 のーは (谷)

の哥は花をのみ心にかけて実にはめもかけぬから¹³⁷
 と申ためり尤さと覚侍うへ古今序にも其¹³⁹
 意侍やらんさるにつきて猶此したの了見愚¹⁴²
 推をわつかにめくらし見侍れは可心得事侍¹⁴¹
 にやいはゆる実と申は詞也かならず古の哥の詞¹⁴⁴
 つよきこゆるを実と申とは定かたかるへし¹⁴⁵
 古人の詠作¹⁴⁷にも心のなからん哥をは無実哥とぞ¹⁴⁸六ウ
 申へき今の人のよめらんにもうるはしくた¹⁴⁹し
 からんをは有実哥とそ申侍へく候さて心を¹⁵²
 先にせよとをしふれば詞をつきにせよと申に似¹⁵³
 たり詞をこそ詮とすへけれといは¹⁵⁵又心はなくとも
 といふにて侍り所詮心と詞とをかねたらんをよ¹⁵⁶
 き哥とは申へし心詞の二はた¹⁵⁷鳥の左右の
 つはさのことくなるへきにこそとそ思給侍る
 但心詞の二をともしかねたらんはいふにをよは
 す心のかけたらんよりは詞のつたなきにこそ¹⁵⁸
 侍らめかやうには注申侍れとも又実によろしき¹⁵⁹七オ
 哥のすかたとはいつれを定申へきやらん誠に哥
 の中道はた¹⁶³、自知へきにて侍り更に人の是こ¹⁶⁴

138 からーかし(広)、うたから(谷)
 139 古今ー古今の(穗)
 140 其意ー其意(冷)、其心(広)、その心得(穗)、
 此心(永・京・谷)
 141 やーなし(谷)
 142 了見ー了見に(谷)
 143 心得ー得心(永・京)
 144 詞ー心(広)、心花と申は詞(穗・永・京・谷)
 145 哥のー哥の哥の(谷)
 146 詞ー詞は(永・京)、詞の(谷)
 147 詠作ー哥詠(谷)
 148 のーナシ(谷)
 149 今ー古(谷)
 150 うるはしくー心のうるはしく(永・京・谷)
 151 た、しからんーた、しく深からん(谷)
 152 とそーと^そ(冷)、と(広)
 153 侍へく候ー侍らん(永・京・谷)
 154 さてーさらは(永・京)
 155 にて侍りーにて侍り(広・穗)、に似たり(永・
 京)
 156 所詮ー詮する所(谷)
 157 た、ーナシ(広・穗・谷)
 158 にーにて(永・京・谷)
 159 にはーに(永)
 160 注ーしるし(広・永・京・谷)
 161 実ーまこと(広)、誠(永・京・谷)
 162 いつれー何(永・京)

すと申によるへからず候¹⁶⁵家々につたへたるすぢ¹⁶⁶
 秀逸の躰¹⁶⁹まち／＼なり俊恵¹⁶⁷はたゝ哥¹⁶⁸はお
 さなかれと申てやかて我哥にもそのすかたの
 哥を秀逸¹⁶⁹とは思¹⁷⁰たりけに候けるとかや俊頼
 はえもいはすたけたかきをよろしと申ためり
 其外¹⁷¹しな／＼に申かへてそ侍更¹⁷²に短慮難
 及そ覺¹⁷³侍なもしれば強¹⁷⁴大事に成侍
 習¹⁷⁵なれともことに此道¹⁷⁶はさと覺¹⁷⁷て侍り」七ウ
 我心¹⁷⁸の中にて哥の昔¹⁷⁹今を思合てみるに
 いにしへよりも当時は事の外によむ哥ことに
 わろくのみ覺¹⁷⁹て是はと思ひていたすはまれに
 そ侍仰¹⁸⁰は弥高き事に侍なりと先賢¹⁸¹
 の遺訓¹⁸²も今こそ思ひしられて侍れ先哥に
 秀逸¹⁸³の躰と申侍へきすかたは万機をもぬ
 けて物にとゝこほらぬか¹⁸⁴この十躰の中のいつ
 れの躰ともみえずしてしかもそのすかたをみ
 なさしは¹⁸⁷さめるやうにおほえて餘情¹⁸⁸うか
 ひて心¹⁸⁹なをく衣冠¹⁹⁰たゝしき人¹⁹¹をみる心ちする」八オ
 にて侍へし常に人の秀逸¹⁹¹の躰と心得て侍

- 163 中道―道(広)
 164 侍り―侍也(永・京)
 165 候―ナシ(永・京・谷)
 166 つたへたるすぢ―たつる(永・京)、立るすぢ(谷)
 167 哥は―ナシ(広)、哥をは(永)
 168 おさなかれと申てやかて我―ナシ(広)
 169 とは―と(永・京)
 170 思たりけに候ける―思ける(永)、思けり(京)
 171 に―ナシ(静)
 172 そ―ナシ(広)
 173 覺―ナシ(広)、覺て(穗)
 174 強―いよく(広・穗・谷)、あなかに(永)、強に(京)
 175 なれとも―されとも(谷)
 176 て―ナシ(永・京・谷)
 177 今―を(冷)
 178 みる―哥(広)
 179 覺て―こそ覺候へ(永・京)
 180 侍なり―侍たり(冷)、侍り(広)、侍めり(穗)、侍りけり(永・京・谷)
 181 先賢の遺訓―先哲の庭訓(永)、先哲の遺訓(京)
 182 躰―様(永・京・谷)
 183 侍―ナシ(広・永・京・谷)
 184 かこの―哥の(永・京)
 185 しかも―しかも又(永・京・谷)
 186 みな―ナシ(広・穗)

は無文なる哥のさはくくと読て心をくれたけ
 のあるのみ申ならひて侍るそれは不覺の事¹⁹³
 にて候かゝらむ哥を秀逸とたに申へくは哥こ¹⁹⁴
 にもよみぬへくそ侍る詠吟事きはまり
 案性すみわたれる中より今とかくもてあつ
 かふ風情にてはなくてにはかにかたはらよりやす¹⁹⁷
 やすとしてよみいたしたる中にいかにも秀¹⁹⁸
 逸は侍へしその哥はまつ心ふかくたくみにこと
 はの外まであまれるやうにてすかたけたかく「ハウ
 ことはなへてつゝけかたきかしかもやすらかに
 きこゆるやうにて遠し²⁰¹ろくかすかなる景²⁰²
 趣たちそひておもかけたゝならすけしきは²⁰³
 さるから心もそゝろかぬ哥にて侍り²⁰⁵これをは
 わさとよまむとすへからす稽古たにも入候へは²⁰⁶
 自然によみいたさるゝ事にて候又古の哥²⁰⁷今の
 哥にもよにいひおほせられぬやうにきこゆる事
 の侍也いまさおほゆる事はいかにも初心の程な²⁰⁸
 るへし上手のわさ²⁰⁹とこゝまでと詞をいひさす²¹⁰
 哥侍りあきらかならすおほめかしてよむ事」九才²¹¹

- 187 はさめーとさめ(京)
 188 てーナシ(広)
 189 なをくーなをく(京)
 190 するにてーすさて(京)
 191 秀逸の躰ー秀逸躰(永・京)
 192 無文ー無事(広)
 193 あるーあるを(永・京)
 194 へくは哥ことにもよみぬーナシ(広)
 195 詠吟ー沈吟(永・京)
 196 今とかくー今日はかく(京)
 197 てーナシ(谷)
 198 にはかにー俄(広)
 199 してーナシ(広・永・京)
 200 いかにもーいかにもく(永・京)
 201 遠し²⁰¹ろくーおもしろく(静・穗)
 202 けしきはーけしきはみ(広)、気色はみて(永・京・谷)
 203 さるからーさなから(広)
 204 心もー心も詞も(永・京・谷)
 205 侍りー侍なり(永・京・谷)
 206 自然によみいたさるゝ事にて候又ー自然(広)、
 自然とよみいたさるゝ事候又(永・京)
 207 哥ー哥にも(永・京・谷)
 208 哥ー哥に(広)
 209 これーこれも(谷)
 210 とーナシ(谷)
 211 未練のーナシ(静)

これ已達²⁰⁹のてからにて侍へしそれをうらやま
しと思ひてまなひもえぬ物から未練²¹⁰の人の
よめるはなに、もつかぬ片腹いたき事にてそ
侍る大方哥にうけられぬは秀句にて候秀句も
自然になにとなくよみいたせるはさてもあり
ぬへしいか、²¹⁶せんととかくたしなみよめる秀
句かきはめてみくるしく見さめする事にて
侍へし又本哥とり侍るやうはさきにもしるし
申候し花の哥をやかて花によみ²¹⁹月²²⁰の哥を
やかて月にてよむ事は達者のわさなるへし」九ウ
はるの哥をは秋冬などによみかへ恋歌²²²をは
雑や季の哥²²³などにてしかもその哥をとれるよ
ときこゆるやうによみなすへきにて候本哥
の詞をあまりにおほくとる事はあるまし
き事²²⁴にて候そのやうにせんとおほゆる詞²²⁵。o²²⁷ 二はかり
とりて今の哥の上下句にわかちをくへきにや
たとへはたくれは雲のはたてに物そおもふあまつ
そらなる人をこふとてと侍哥をとらは雲の
はたてと物思ふといふ詞をとりて上下句²³¹にを

- 212 にてそにて (永・京、にそ (谷)
213 は―ものは (広・永・京・谷)
214 秀句―集句 (永・京)
215 秀句―集句 (永・京)
216 いか、―いか (谷)
217 秀句―集句 (永)
218 へし―なり (広)
219 月の哥―月 (永・京)
220 よむ―よまむ (永・京)
221 よみかへ―よみ (静)
222 恋歌―恋の哥 (広・永・京)
223 の哥など―などの哥 (谷)
224 事―と (広)
225 にて―に (谷)
226 やうに―中に (広・永・京・谷、やうは^{中に}は (穂)
227 詞―詞を (永・京・谷)
228 上下―上下の (広・穂)
229 人をこふとて―ナシ (広)
230 と物思ふ―に物そ思ふ (永・京)
231 上下句―上下の句 (広・穂・谷、上句下句
(永・京)
232 の―o (冷)
233 雑季―雑や季や (永・京、雑や季 (谷)
234 哥をとるとて―哥をとりて (広)、「哥をくたく
ひも侍り」ナシ (谷)
235 たくれ―たくれの (永)
236 などはとは (穂)

きて恋の哥ならさらん雑季233などによむへし」一〇オ
 このころもこの哥をとるとてたくれの詞をも
 とりそへてよめるたくひも侍りたくれなとはとり237
 そへたるになとやらんあしくもきこえすめつらしく
 せんとおほゆる詞をさのみとるかわろく侍なり
 又あまりにかすかにとりて其哥にてよめるよ
 とも見えさらんはなにの詮か侍へきなればよ
 ろしくこれらは心えてとるへきにこそ又題を
 わかち候事一題243をはいくたひも下句にあら
 はすへきにて候二字三字より後は題の字を246
 甲乙の句にわかちおくへしむすひ題を248は「一〇ウ
 一所にをく事は無下の事にて侍とやらん又
 かしらにいたゝきていてたる哥無念と申へし250
 ふるくも秀逸252ともの中にさやうのためし侍れ
 ともそれを本にひくへきに候はすかまへてある
 ましき事に候但257又よくいてきたる哥にとり
 てすへて五文字ならて題の字のをかれさらん
 は制のかきりにあらずそうけ給をきて侍し病262
 事は平頭の病はくるしからす候声韻の病265

237 とりそへたるになとやらん一などやらんとりそ
 へたるも (永・京)
 238 を一ををは (広)
 239 とるか一したるく取 (谷)
 240 かすか一さすか (冷、幽 (永・京・谷)
 241 とりて一とらんとて (谷)
 242 は一ナシ (広)
 243 一題一字 (広)、一字題 (穂・永・京・谷)
 244 に一の (谷)
 245 後は一の (谷)
 246 を一ををは (谷)
 247 おくへしむすひ題を是一所にをく一をかさる (広)
 248 は一ナシ (永・京・谷)
 249 とやらん一とかや (永・京)
 250 かしら一題 (広)
 251 哥一ナシ (広)
 252 とも一ナシ (谷)
 253 侍れ一侍る (永)
 254 候はす一あらず (永・京)
 255 かまへてあるましき事一ナシ (広)
 256 に一ナシ (広)、にて (永・京)
 257 又一ナシ (静)
 258 に一ナシ (永)
 259 五文字一五文字の所 (谷)
 260 そ一とそ (広・穂・永・京・谷)
 261 て一ナシ (広)
 262 病事一病の事 (永・京・谷)

はかならずさらまほしく候平頭の病もなからん
 にはおとりにて候四病八病などは人のみなし」二ニ
 れる事にて候へは事あたらしく勘申にをよは
 す候²⁶⁹天性病にをかされぬ程の哥に成ぬれば
 いつれの病もいたつら事にて候へしさてよろし
 からぬ哥のしかも病さへ候はんは又徒事にてこそ候
 はめ²⁷²三首哥²⁷³五首哥乃至十首までもおなし
 詞をよむ事は心あるへきにて候めつらしからぬ
 詞はあまた所によめるもくるしからすみゝにたつ
 詞のめつらしきはなかことはにて候はねとも二字三
 字もあまたよみつればあさましき事にて候
 ちたいその詞をこのむよと人にきゝなざるましき」二ニウ
 事と亡父卿も制し候し事候けに又わろく
 覚候雲風夕くれなとやうの詞はいくつよめらん
 もよもくるしき事候はしと覚て候それも²⁸⁰
 よからん哥のすてかたからんはいくらも同詞を
 よみすへてさて候なん無下のゑせ哥のみたり²⁸³
 かはしく同詞をさへよみませたらんはいとよからし
 にて候当時あけほのゝ春夕くれの秋なとやうの

- 263 の一ナシ (広・京)
 264 候一ナシ (永・京)
 265 の一ナシ (広)
 266 の一ナシ (広・永・京)
 267 にて候一候 (広)、て候 (穂)、候へく候 (永・京)、候へし (谷)
 268 にて一に (永・京・谷)
 269 候一ナシ (京)
 270 の哥一ナシ (静)
 271 は一には (谷)
 272 三首哥一三首 (静・谷)、三首の哥 (永・京)
 273 五首哥一五首 (静)、五首の哥 (永・京・谷)
 274 も一ナシ (谷)
 275 あまた一あまたに (谷)
 276 と一とあさからず (永・京・谷)
 277 も一ナシ (永・京・谷)
 278 事候一に候 (静・広、にも (穂)、に (谷)
 279 又一又よに (谷)
 280 もよも一おも (永)
 281 くるしき事候はし一くるしう候まし (永・京、くるしう候はし (谷)
 282 と覚て候一ナシ (広)、と覚候 (永・京・谷)
 283 さて一さても (永・京・谷)
 284 を一ナシ (静)
 285 とよ一事 (永・京)
 286 にて一に (谷)
 287 し一ナシ (広)

詞つゝきを上なる好士ともよみ候とよいたく
 うけられぬ事にて候やうくしけにあげほ
 のゝはるゆふくれの秋なとつゝけて候へともたゝ」二二オ
 心は秋の夕暮春のあけほのをいてすこそ候めれ
 けに心たにも詞ををきかへたるにつれてあたら
 しくもめてたくもなり侍るは尤神妙なる
 へく候をすへてなにの詮ありとも見えず候こ
 とにおこかましき事にて候これらそ哥の
 すたるへき躰にて候める且はいまくしき事
 と返く申をき候しに候さきにしるし申候し
 十躰をは人の趣をみてさつくへきにて候器量
 も器ならぬもうけたるその躰侍へし或は
 幽玄の躰をうけたらん人に鬼拉の様をよめと」二二ウ
 をしへ又長高の様をえたる輩に濃躰をよめと
 をしへん事はなにかよかるへきたゝ仏のとき
 給へるあまたの御法も衆生機にあたへ給へると
 かやそれにすこしもたかふへからすわかこのむやう
 うけたるすかたなればとてこの躰をよめと得ざらん
 人にをしへ候はん事返々道の魔障にて候へし

288 候めれ―それに(広)
 289 侍るは―侍りは(冷)、侍らんは(永・京)
 290 詮―詮も(谷)
 291 見えず候―不見(永・京)、見えず(谷)
 292 にて―に(谷)
 293 これら―これ(永・京)
 294 事と―ナシ(広)
 295 に候―ナシ(広)、にも(穗)
 296 趣―気の趣(永・京)、機の趣(谷)
 297 器―器量(穗・永・京・谷)
 298 の―ナシ(広・永・京)
 299 鬼拉の様―鬼拉の躰(広)、拉鬼躰(永・京)、
 拉鬼のやう(谷)
 300 又―候(広)
 301 の―ナシ(広・穗・永・京)
 302 よめと―ナシ(永)
 303 をしへん事は―をしへは(永・京)
 304 よかる―よく候(永・京・谷)
 305 も―にも(広)
 306 衆生―衆生の(広・永・京・谷)
 307 候はん事―候はん(広)、ん事は(穗)、候はん
 ことは(谷)
 308 へし―へく候(永・京)
 309 いつれの躰―何の躰(永・京)
 310 よまむ―よむ(広・静)
 311 なをく―なをく(静・穗)
 312 事―ナシ(広)

その人のよめらん哥を能々見したゝめて後に
 風躰をさつくへきにて候いづれの躰をよま³¹⁰
 むにもなをくたゝしき事³¹²はわたりて心にか³¹¹
 くへきにこそされはとて又その一躰³¹³に入ふして」二三オ
 餘躰をすてよとには候はず得たる躰を地盤と³¹⁶
 して正位によみすへてさて餘の躰をよまむは³¹⁴
³¹⁷くるしくは候ましたゝ正路を忘てあらぬ方に
 おもむくをつゝしむへき事とそおほえ侍今³¹⁸
 の世にもかたをならへてたかひに達者の思をなし³¹⁹
 たる輩も多分この趣をわきまへかねて
 たゝわかよむ様をまなへとのみをしふる
 事無下の道³²⁰しらぬにて侍へし若我に³²¹
 こえて物をもたかく案しすくれたるすかたを³²³
 天骨とよむ人のあらんにかやうに提撕³²⁴をは「二三ウ
 なにかよろしく侍へき俊頼朝臣清輔³²⁵などの
 庭訓抄にもこのよしを³²⁶はよく申ためり³²⁷とそ
 見え侍るかまへて邪にむくところをそいか³²⁸
 にもまもりをしふへきにて候如法機量³²⁹なる³³⁰
 人もをしへをうけすして雅意³³¹にまかせて³³²

313 一躰―躰 (広)
 314 す―す候 (広)
 315 躰―所 (永・京)
 316 と―に (谷)
 317 くるしくは―くるしく (広)、くるしう (永・京・谷)
 318 そ―は (京)
 319 て―ナシ (京)
 320 の―に (永・京)
 321 道―道を (永・京・谷)
 322 に―より (永・京)、よりも (谷)
 323 も―ナシ (谷)
 324 よむ―よまむ (永・京・谷)
 325 をは―せは (冷・広・静・穂)、しては (永・京・谷)
 326 か―と (谷)
 327 清輔―清輔朝臣 (永・京)
 328 は―こそ (広)
 329 よく―まゝ (永・京・谷)
 330 とそ見え侍る―ナシ (永・京)
 331 むく―をもむく (広・谷)、おもむく (穂・永・京)
 332 まもり―まほり (永・京・谷)
 333 如法―如法に (谷)
 334 機量―器量 (広・穂・永・京・谷)
 335 雅意―雅うた (京)
 336 おもむく―をもむき候 (谷)
 337 の―ナシ (広)

よみゐたれば口の自然に邪におもむく事
 の候なるまして不器の人のことにわれとた、
 をさへてよみならはむとし候へはあしくなり行
 候へともすくになるみちは候はす凡哥をよく見
 わけて善悪をさたむる事はことに大切の^{一四}才
 事にて候たゝ人ことに推量はかりにてぞ侍ると
 みえて候その故は上手といはるゝ人の哥をはいと
 しもなければともほめあひいたくもちゐられ
 ぬたくひの詠作をは抜群の哥なれとも結句難
 をさへとりつけてそしり侍めりたゝぬしにより
 て哥の善悪をわかつ人のみそ候めるまことに³⁵¹
 あるましき事と覚侍るこれは偏に是非にま³⁵³
 とへるゆへなるへしおそらくは寛平以往の³⁵⁵
 先達の哥にも善悪の思わからん人そ哥の雌³⁵⁶
 雄を存せるにては侍へきかくしれるよし申侍れ³⁶²一四ウ
 とも愚老もいやくゝわきまへえたる事³⁶⁴
 そさりなからさしも卑下すへからず去元久³⁶⁶
 比住吉参籠の時汝月あきらかなりと冥の³⁶⁸
 霊夢を感じ侍しによりて家風にそなへんた³⁷⁰

338 なる一也(永・京・谷)
 339 不器一非器(永・京)
 340 の一ナシ(広)
 341 た、一ナシ(広)
 342 あしく一あしくは(永・京・谷)
 343 すくになる一すくゝなる(冷)、あかる(永・京・谷)
 344 は一ナシ(谷)
 345 凡一凡は(永・京・谷)
 346 よく一ナシ(谷)
 347 は一か(永・京・谷)
 348 ことに一まことに(永・京・谷)
 349 みえて一みえ(永・京・谷)
 350 と一と世に(穂・永・京・谷)
 351 哥の一ナシ(広)
 352 そ候一候そ(広)
 353 あるましき一あさましき(冷・静・広・穂・永・京・谷)
 354 侍る一給へる(永・京)、給ふる(谷)
 355 に一を(冷)
 356 まとへるゆへ一まよへるゆへ(永)、まよへる様(京)
 357 以往一已後(広)
 358 の一〇(冷)
 359 の一を(広)、ナシ(穂)
 360 らん一たん(冷・静・広・穂)、たれん(永・京・谷)
 361 雌雄一おもむき(穂)

めに明月記を草しをきて侍事³⁷²身には過分³⁷³
 のわざとそ思³⁷⁴給るかやうのそゝろ事³⁷⁵まで申³⁷⁶
 侍る事いとかたはらい³⁷⁷たうそ覚侍る又古詩の
 心詞³⁷⁸をとりてよむ事³⁷⁹凡哥にいましめ侍習と
 ふるくも申たれともいたくにくからすこそしけう³⁸⁰
 このまで時³⁸²くませたらんは一ふしある事にてや」一五才
 侍らんつねに白氏文集の第一第二の帙の中に³⁸³
 大要³⁸⁵に侍りかれを披見せよとそ申をき侍し³⁸⁴
 詩は心をけたかくす³⁸⁶ます物にて候尤哥よまむ³⁸⁵
 時³⁸⁷高人の御前³⁸⁸とならば心中にひそかに吟し³⁸⁹
 さらぬ会席ならは高吟もすへし哥には³⁹⁰
 まつ心をよくす³⁹¹ますは一の習にて侍也我心に³⁹²
 日比³⁹³おもしろしと思得たらん詩にても又哥にても³⁹⁴
 心にをきてそれを力にてよむ³⁹⁵へし初心の程は³⁹⁶
 あなかちに案すましき³⁹⁷にて候さやうに哥はた、³⁹⁸
 案すへき事とのみ思て間断なく案し候へは性も」一五ウ³⁹⁹
 ほれかへりてしり⁴⁰⁰そく心のいてき候に候口なれん⁴⁰¹
 ためにははやらかによみならひ侍へしさて
 又時⁴⁰²くしめやかに案してよめと亡父⁴⁰³もいさめ

362 存せる―存する (広・穂・永・京)
 363 よし―よしには (穂・永・京・谷)
 364 いやく―つやつや (冷・静・広・穂・永・京・谷)
 365 事―所 (永・京・谷)
 366 さしも―ナシ (広)、さし〇 (永)
 367 す―さる事とそおぼえ侍る (永・京)、さる事は (谷)
 368 比―の比 (静・広・穂・谷)
 369 汝―海 (穂)
 370 感し―感じて (谷)
 371 そなへん―備が (谷)
 372 をきて―ならへて (谷)
 373 侍事―侍し (広)、侍事も (永・京・谷)
 374 そ―ナシ (広)
 375 思給る―覚侍る (谷)
 376 のそゝろ事まで―のそゝろ事さへ (永・京)、の
 ことそゝろに (谷)
 377 いたう―いたく (永・京)
 378 心―ナシ (永)
 379 凡哥にいましめ侍習と―ナシ (広)
 380 ふるく―古人 (広)、ふるる (谷)
 381 しけう―しこう (永)
 382 時―時に (谷)
 383 の―ナシ (永・京)
 384 の―ナシ (永・京)
 385 大要に―大要 (広・穂)、大要の所 (永・京・谷)
 386 けたかく―高く (谷)

申候しはれかましき⁴⁰⁴会合の時⁴⁰⁵はあまりに⁴⁰⁶哥
 かすおほくよむ事⁴⁰⁷不可然候⁴⁰⁸歎⁴⁰⁹稽古も初心
 も用意おなし事にて候⁴¹⁰百首などの続哥には
 四五首⁴¹⁰已達は七八首⁴¹¹よき程にて候へし(※②)初心のほ
 とはひとり哥⁴¹²を常にはやくもをそくも自在に
 うちくよみ⁴¹²ならはすへく候⁴¹³よみすてたらん哥⁴¹⁴を無
 左右人にちらしみする事⁴¹⁵ゆめくあるへからず候
 いかにも未練の程は日比⁴¹⁶よみなれたる題にてよむへき
 にて候(※③)あからさまにも座⁴¹⁷たしからずして
 よむへからずといさめ申候⁴¹⁸しに候又哥の五文字は
 よく思惟^{シユイ}して後にをくへきにて候されは故禪
 門も哥⁴¹⁹ことに五文字をは注につけ候しに候⁴²⁰披講
 の時沙汰⁴²¹いてきてされはなにの心に哥⁴²²ことにし初句
 のそはにかゝるらん⁴²³と人く不審^{フツン}し侍し
 返答に五文字をは後⁴²⁴によみかき候⁴²⁵程に注の
 様に候と申て侍しに満座⁴²⁶一ふしある事⁴²⁷聞得
 たりと思⁴²⁸氣にていろめきてこそ候しか今には「一六ウ
 かに勘申候⁴²⁹さためて髣髴^{フツツ}きはまりなうそ候
 らんとあさましき⁴³¹まてに思給候⁴³¹なからひとへに

387 時―時は(永・京・谷)
 388 高―其(穂)
 389 なと―ナシ(永・京)
 390 に―ナシ(広)
 391 まつ心―心(広)
 392 は―か(広・永・京・谷)
 393 の―ナシ(谷)
 394 侍也―侍り(永・京)
 395 おもしろし―面白(谷)
 396 又―ナシ(広)
 397 よむへし―よみ侍るへし(永・京)
 398 にて―にても(京)
 399 た―ナシ(谷)
 400 しりそく―退屈(京)
 401 き候に候―来り候(広、き候(穂)、き候には(谷))
 402 又―ナシ(広)
 403 亡父―亡父聊(広・穂・永)
 404 申候し―候し(永・京)
 405 会合―参会(谷)
 406 に―ナシ(広、て(永))
 407 事―事は(広)
 408 候―ナシ(永)
 409 稽古―抑稽古(永・京)
 410 四五首―四五首(穂)、初心は四五首(永・京・谷)
 ※②【異文2】(穂・谷)

愚訓をのみまほるそのおほせかたしけなく候

まゝに左道の事ともしるし付候相構ゝ不⁴³³

可及外見候大体愚老か年来の修理の道

只此条々の外はまたく⁴³⁵他の用意なく候⁴³⁶⁴³⁷⁴³⁴

随分心底をのこさすかきつけ侍りかなら

すこの道の眼目とおほしめして御覽せら

れ候へく候あなかしこく⁴³⁹一七才

^{本云}承久元年七月二日或人返報云々

以被草本為備後生之用心聊

染筆了⁴⁴⁰

藤原朝臣為家

判一七ウ

此本静為披見俄於燈下

片時書写候本云仍更無文字形

尤不可免他見而已

侍従為秀

判一八オ

411 常に一つおね(広)

412 よみならはず詠しならず(永・京)

413 事ゆめく^{勢イ}事(穗)

414 候一ナシ(広)

415 よみなれよみならひ(永・京)

416 よむへきにて候よむへきよし申事にて候(静)、詠すへきよし申事にて候(永・京)

※③【異文3】(穗・永・京・谷)、九字分程墨で抹消(冷)

417 にも座たゝしからす□^本からす(谷)

418 といさめーといましめ(静・永)、「といさめ申候しに候一ナシ(谷)

419 に候一ナシ(広・穗・永・京)、に(谷)

420 披講ある披講(永・京)

421 沙汰一^オさた(穗)、この沙汰の(永・京・谷)

422 初句一初心(谷)

423 人く一人々に(谷)

424 をはーを(谷)

425 よみーのみ(永・京・谷)

426 にかは(広・永・京・谷)

427 聞一たゝ(谷)

428 にかーいか(広)

429 申候一申候にか(広)、申せは(永・京)

430 きはまりなうそ候一あることや(谷)

431 給候一ナシ(広)、給(谷)

432 まほるーまもと候(広)、まもと(永・京)

433 不可及外見一不可及他見(静)、不可有外見

●異文

以下の異文箇所については、谷山文庫蔵本で本文挙げ、異同を示す。

【異文1】(穂・永・京・谷)

かやうに申せはとてかならず拉鬼^a駢^bか哥の勝^bたる体にてあるには候ましざるから

a 駢―様(永・京)
b 勝たる駢―すぐれたる駢(穂)、勝駢(永・京)

【異文2】(穂・谷)

それも人数によるへきにて候

【異文3】(穂・永・京・谷)

わつらはしき題のたやすくとりつきかたきはいかにもわろかるへきにて侍りくせ題^cなどをはちとよみ口^dなれて今はと

c をは―は(永・京)
d なれて―なれて後(穂・永・京)
e も―を(永・京)

434 (永・京)、外見に及ぶましきに(谷)

435 の―ナシ(永・京)

436 またく―全く(永・京・谷)

437 の―に(広)

438 用意―用心(永・京・谷)

439 つけ―つゝけ(永・京・谷)

440 く―ナシ(永・京)

441 了―歟(谷)

候―ナシ(冷)

覚えん時又よみならふへく候難題などをてかけもせずして
 はかなふへからず候哥をはかまへてたゞしく居てよみ習へ
 く候或は起ながら案し臥て又よみなと身を自由にしてよみ
 つけぬれば晴のとき法式たかひたるやうに覚てすへてよま
 れぬ事にて候何事もくせになりては詮なき事にて侍るへき
 万のわさはたゞしさまのうるはしきをもてよしと申事にて候

f かなふへからず候^f—かのふへからず(穗)、不
 可叶候(永・京)
 g 起^g—たち(穗)、立(永・京)
 h 案し臥て—あんしてふして(穗)、案しうつふ
 して(永・京)
 i 自由ⁱ—ちさい(穗)
 j 何事も—ナシ(穗)
 k にて—にてそ(穗)
 l へき—へし(永・京)
 m 万—よろつ(穗・永)

注

(1) 最新の論考としては、寺島恒世「有心体の成立」(『和歌史の中世から近世へ』(花鳥社、二〇二〇)所収)がある。なお、拙稿「毎月百首を読む」ということ―『毎月抄』の時代―(『日本文学』七二二、二〇一三・七)でも論じたことがある。

(2) 『毎月抄の校本』(『国文学研究』六二、一九七七・六)。また、高梨素子「毎月抄の伝来考」(『国文学研究』六一、一九七七・三)参照。

(3) 前掲注2高梨論は、「二条家系統本」を「凝念系統」と呼称するが、凝念(「疑念」とする本もある)は二条家末流の歌僧と考えられ、本稿ではそれ以前から提唱されている二条家系統本という呼称を用いた。

〔付記〕 本稿はJSPS科研費(JP19K00305)の成果の一部である。

二〇二二年一月十三日受理、二〇二二年一月十四日採択

